

こぼれをめぐると実践と考察

阪神・淡路大震災 20 年研究会

渥美公秀・石原凌河・近藤誠司・杉山高志・住田功一・高野尚子・高森順子・宮本 匠・矢守克也

1. 震災遺族と防災研究者の交流会

執筆：近藤誠司

1.1 問題意識

阪神・淡路大震災から 20 年を迎えることになる 2014 年度、その初頭の 4 月に当該グループ「阪神・淡路大震災 20 年研究会」は発足した。構成メンバーは、20 代～50 代の研究者を中心とする 9 名である。みな普段は、関西を本拠に活動している。

およそ 2 か月に 1 回の頻度で、駅の雑居ビルにある小さな会議室に集まり、各メンバーからの話題提供をもとに、3 時間程度の討議を重ねることにした。これまで、各人がそれぞれの立場で「阪神・淡路大震災」という出来事に関わり、その総体を受け止めようと格闘してきた。そのなかで掬い取ることができなかった、“何か (something)” を、あらためて見詰める／煮詰めることが本会のねらいである。われわれは、何を見過ごしてきたのか、また、あらたに何をなすべきなのか、問題意識はそこにあった。

この会合によって浮かび上がった事項—通過点としての小括—は、敢えてひとつにとりまとめることはしなかった。各人が自分の置かれた“状況”に引き寄せ、それぞれのアプローチを震災 21 年以降も続け、機を見て交錯させてみればよい。しかし、それでもやはり、震災 20 年を前にして、意図せず共通して手繰り寄せられた“糸口”のようなものがあつた。

これを端的に約言してしまえば—しかし、これはきわめて乱暴でもあるのだが—、「関係性の不足 (感)」ということになるだろう。被災地と呼ばれるエリアの中で、われわれはたくさんの人と出会い、つながって

きた。しかしそれは、真なる意味において、多様で多層だったのだろうか。被災地の中と外、この境界を越えて、あるいは往復して、われわれはより多くの人と手を結び、連携や連帯を模索してきた。しかしそれは、真なる意味において、豊穡な関係性を構築できたのであろうか。被災の体験や教訓を伝承することを標榜して、われわれは次世代、ならびに未来の他者に思いを馳せようとしてきた。しかしそれは、真なる意味において、過去や現在を享受し、未来を創造する取り組みにまで鍛え上げられた実践だったのだろうか。

こうした問題意識を“純化”するかたちで、当会のひとまずの終着点として、ひとつの実践を試行することにした。しかし以下に述べる企画 (震災遺族と防災研究者の交流会) のアイデアは、メンバーの中で必ずしもすぐに賛同を得たものではなかった。トライアルというよりも、チャレンジといったものに近く、したがって、開催当日まで、いやもつと言え、振り返りの際においてさえ評価が分かれるものとなった。

1.2 遺族と科学者、まなざしの異同

まず、「関係性の不足 (感)」が指摘できる典型として、「震災遺族」と「科学者」の二者が想起された。

「震災遺族」は、二度と同じような悲劇を繰り返さないでほしいという切なる願いを胸に、震災以降、歩んで来たはずである。一方の「科学者」たちも、震災の教訓を無駄にしないために、防災・減災の推進や安全の確立に寄与しようと尽力してきたはずである。双方のベクトルは、ほぼ一致している。しかし双方の思いを直接的に重ねる場—こぼれを交わす機会—は、これまでさほどなかったのではないか。

そこで、「震災遺族と防災研究者の交流会」をおこ

ない、双方がそれぞれに対して、どのような思いを寄せているのか確かめながら、双方を“直に”つないでみようということになった。図1は、企画のちらしである。案内文の中に、上述したねらいが記されている。

1.3 交流会のフレーム

神戸市内に広めの会場を借りて、12月半ばの土曜日の昼下がり、たっぷり3時間ほど時間をとって、震災遺族と防災研究者の交流会がおこなわれた。

3名の震災遺族と、3名の若手の防災研究者がメインゲストとして招かれた。それ以外にも、震災の語り部や学生などが参加した。参加者は総勢31名だった。

会の冒頭で、3名の震災遺族には、自身の今の心境を述べてもらい、さらに科学/科学者に対する率直な疑問や期待を語ってもらった。また、3名の防災研究者には、何を専門としているのか、どんな思いで研究しているのかを端的に話してもらった。そのあと、震災遺族と防災研究者を各1名含む3つの班に分かれて、ファシリテーターの進行によって、もう一度、それぞれの思いをことばにさせていただいた(写真1)。



写真1 「震災遺族と防災研究者の交流会」の様子

1.4 紡がれたことば

3つの班で、それぞれやりとりされたことばは大きく異なった。ある班では、そもそも「防災・減災」ということば自体に違和感があることが、震災遺族から表明された。また防災研究者からは、震災遺族にどんなことばをかけてよいのかわからないといった戸惑いがあること、また、研究者自身も子を持つ親であり、震災で肉親を失うことのつらさはきっと共有できるはずだとすることばも聞かれた。

会の終了後、参加者はみな、振り返りシートに感想を記入した。そこに、印象に残ったことばを記す人が数多くいた。紡がれたことばの一部を掲載する。

- 防災・減災は人を幸せにするものでなければならない。そこに生まれてよかったと思えるような情報を提供していただきたい(震災遺族)
- 被災者の心を捉えることなしに、人を幸せにする防災は成り立たないと思う(震災遺族)
- 震災で家族を亡くした人のお話を聞くのは初めてでした(略)。まだまだ研究すべき課題は山積みだと改めて感じた交流会でした(防災研究者)
- これほどまでに「向き合う」や「寄り添う」ということを真摯に受け止め、考えたことはなかった(略)今後の研究への励みになった(防災研究者)
- 伝えたいことが多過ぎて(略)もっと交流したかったです(震災遺族)

震災20年研究会 交流会企画
震災遺族と防災研究者の交流会

二度と同じ悲劇を繰り返してほしくないという、「震災遺族」たちの切なる願い。
次なる災害では出来る限り被害を出さないよう、防災研究を続ける「研究者」たちの決意。これまでKOB Eにおいて、このふたつの思いは、しっかり交わることができていなかったように思います。双方からゲストを招き、心を通わせ、未来に向けた、KOB E発のあたらしい「懸け橋」のかたちを模索したいと思います。

日時 2014年12月6日(土) 13:00-15:30
場所 兵庫県国際交流会館 多目的ホール

【交通経路】

阪急神戸線「王子公園駅」下車 徒歩10分
JR神戸線「灘駅」下車 徒歩5分
阪神本線「岩屋駅」下車 徒歩3分

主催：震災20年研究会
共催：京都大学防災研究所
減災社会プロジェクト

会館の位置 House Location

案内図

図1 「震災遺族と防災研究者の交流会」ちらし

2. 学校防災教育における実践

執筆：石原凌河

前章の問題意識と取り組みをふまえて、「震災 20 年研究会」のメンバーは、震災 20 年を超えて、様々な取り組みを展開していった。

本章以降で、各執筆担当者の責任においてその一部を報告する。

2.1 防災研究者と学校教員との“架橋”

本章は、一見すると立場を異にすると捉えられがちな「防災研究者」と「学校教員」とを“架橋”しようとした実践事例の報告である。

言うまでもなく防災分野は、専門家が有する防災の知識を一般市民に還元することがとりわけ必要とされている。特に東日本大震災以降は、地震学等の研究成果が一般市民に共有されていなかったという反省から、専門家が有する知識を一般市民へ提供する「アウトリーチ」と称される機会が増えてきた（矢守・宮本、印刷中）。

本来は、専門家による防災教育を基礎として、一般市民が主体的に防災活動を広げることが望ましい。しかし、「専門家と一般市民」という枠組みだけに焦点をしばり過ぎると、専門家による一方的な講演や授業により、本来の防災・減災活動の主役であるはずの当事者から主体性を奪うことにつながりかねない。学校教育に限って言えば、学校教員のほうが防災研究者よりも地域の特性や事情、更には教育的な知識や技法について深く理解しているはずである。それにも関わらず、学校教員から防災研究者による出前授業の依頼があり続けるのは、学校教育の現場において防災教育の授業をいわば専門家に“外注する”という側面も有していると考えられる。もちろん、防災研究者という第三者が授業をすることによって、新たな知識や考え方が提供されるといった利点はある。その一方で、学校教員自身が防災教育の授業を主体的に取り組む機会を奪っていった負の側面も考えなければならない。この点に関して諏訪（2015）は、「防災の専門家は防災

教育を一生懸命広げようとしています。ただ、その任務を背負い込んで、何でも自分でやろうとしてしまう専門家が多いような気がします。自分だけが防災教育の担い手になってしまい、学校に担い手を作れていないのです。専門家が教室で実践すればするほど、防災教育に関わる教職員が育たないのです」と指摘し、防災研究者が自分自身で取り組み過ぎるあまりに、本来の学校防災教育の担い手としての学校教員のほうが育っていないため、防災教育が広がらないことを問題提起している。実質的に防災教育に広がりを持たせるためには、まず学校教員が主体的に防災教育に取り組み、専門家としての防災研究者はそれをサポートするような体制をとること、すなわち防災研究者と学校教員とをうまく“架橋”して、望ましい防災教育のありかたを構想していくことが求められる。

2.2 徳島県阿南市の防災教育授業

筆者は、フィールドとして関わり続けている徳島県阿南市で、毎年 4～6 校の小中学校での防災教育授業を、2011 年から計 4 年間実施してきた。しかし、上述した問題意識から、2015 年度は専門家による一方的な防災教育授業を実施するのではなく、防災研究者である筆者と学校教員との両者が協働して学校防災教育について検討することにした。

具体的な方法として、まず、防災研究者の立場として筆者が防災教育の出前授業を実施し、その様子を学校教員に見てもらった。次に、筆者が授業で使用した教材を学校教員に提供するとともに、防災教育を実施する上での留意点や教材の活用方法等の助言と意見交換をおこなった。そして最終的には、防災研究者による授業内容をふまえて、学校教員単独による授業を実施してもらった。このような一連の取り組みを阿南市内の小中学校計 4 校で行った。

この一連の防災教育では、「クロスロード」を題材とし、授業コマ 2 時間連続で実施することにした。その理由として、短時間で、かつ授業に関わる事前準備や配布教材を必要とすることなく実施が可能であることと、「クロスロード」の設問そのものを学校教

員が自ら作成できるため、学校教員が主体的に授業を
発展させやすいと考えたからである(矢守他, 2005)。

こうした取り組みから、学校教員がローカルにねぞ
したことばで児童に語りかける様子を確認するこ
うできた。例えば、筆者の場合であれば、南海トラフ
巨大地震における津波の発生確率について説明する
際に、天気予報で降水確率が70%であれば傘を持っ
ていく人が多いということを引き合いに出していた。
そして、徳島県阿南市における南海トラフ巨大地震の
発生確率が30年以内に60~70%もあるのだから、
事前の防災対策をおこなう重要性が高い点を指摘す
るのである。ところが、学校に置き傘をしている児童
が多いことや、雨が降れば走ってすぐに帰ることがで
きる土地柄であるため、当該小学校では天気予報を参
照して事前に傘を持って登校するという習慣がそも
そも存在しておらず、降水確率のたとえば、児童には
十分に伝わらないものであることがわかった。

この点に関して、学校教員が実施した授業では、南
海トラフ巨大地震の津波発生確率の事例について、児
童になじみがある離島と本島を結ぶ定期船が欠航す
る頻度を引き合いに出して説明がなされていた。この
たとえに対して、児童の反応は良好で、理解が進んだ
ように見受けられた。後に実施した意見交換の際には、
学校教員から「来年度以降も本教材を活用して授業を
実施したい」や「国語のディベートの時間でも本授業
を取り入れたい」等のように、学校教員が主体的に授
業を展開したいとする多数の声があげられた。

この一連の取り組みは、学校教員だけでなく、防災
研究者の側一すなわち、筆者の側一に対しても良い影
響を与えたものと考えられる。関連するエピソードを
ひとつ紹介する。防災研究者による授業の中で、「自
宅で地震にあいました。近所の消防団に参加している
お父さんが、住民の救助をするために家から離れると
家族に伝えましたが、自分や家族の安全も大切です。
あなたは、お父さんが救助に行くことに賛成します
か？」^④という父親の救助活動参加に対する賛否を尋
ねる「クロスロード」を実施した。ところが、授業の

様子を見ていた学校教員から、授業後の意見交換の際
に、父親がいない児童への配慮が欠けているとの指摘
を受けた。当たり前ではあるが、筆者は防災・減災と
いう観点を最重要視して「クロスロード」の設問を検
討していたため、児童への教育的な配慮については見
通すことができていなかった。こうした反省から、後
日おこなわれた学校教員の授業では、古着を被災地に
救援物資として送ることに賛否を尋ねる「クロスロ
ード」の設問に差し替えることになった。このときのや
りとりをふまえて、筆者が他校で実施する授業でも、
学校教員が差し替えた設問と同じものを使用するこ
とにした。

2.3 防災教育授業における“架橋”の意義

防災研究者と学校教員とを“架橋”することになっ
た学校防災教育の実践により、学校教員が児童に理解
しやすいローカルなことばで説明しようとする構え
や、防災教育に対して主体的に取り組もうとする意思
が生まれた。また、防災研究者に対しても、児童が理
解しやすい教材に改編するよう要請する動きも見ら
れ、防災研究者と学校教員の双方が防災教育のベター
メントに向けて共に実践しようとする姿勢が伺える
ようになった。

本章で紹介した事例に限らず、それぞれの立場を超
えて“架橋”しようとする実践は、減災社会に向けた
様々な実践の中身をより豊かなものへと発展させて
いくひとつの基軸となるに違いない。

補注

- (1) 本設問については矢守克也編著『被災地デイズ：時代
QUEST-災害編-』弘文堂、2014を参照して作成した。

参考文献

- 1) 矢守克也, 宮本匠編著「減災学：5つのフロンティア」新
曜社, 印刷中。
- 2) 諏訪清二「防災教育の不思議な力：子供・学校・地域を変
える」岩波書店, 2015。
- 3) 矢守克也, 網代剛, 吉川肇子「防災ゲームで学ぶリスク・
コミュニケーション-クロスロードへの招待」ナカニシ
ヤ出版, 2005。

3. 記録表現の場を継続して作ること

執筆：高森順子

3.1 「阪神大震災を記録しつづける会」の再出発

2015年1月10日、兵庫県民会館では、一つの手記集の完成記念会が開かれていた。阪神・淡路大震災から10年間、年1冊のペースで被災者の手記を集め、手記集として発刊する活動をおこなっていた「阪神大震災を記録しつづける会」が開催したものである。

この会は、10年間のブランクを経て、震災20年目にあらためて活動を再開した。会の発足時から、10年10巻を活動目標に掲げてきた「記録しつづける会」にとって、20年目に手記集を作ることは、会の運営メンバーにとっても、手記の執筆者たちにとっても、想定外のことであった。

代表であった高森一徳（本章の執筆者の伯父）が震災10年の節目に合わせるようにして亡くなったこともあって、会の活動は「休止」を余儀なくされていた。これが、実質的には「休止」ではなく「終了」になってしまうものと、同会の関係者の誰もがそう認識していた。

そのような閉塞した状況が、すぐに変化の兆しを見せたわけではなかった。筆者が2010年から手記執筆者たちと対話を重ねてきた「手記執筆者の集い」は、毎年1回開催するようになった。それに合わせて筆者が「事務局長」という肩書きを名乗り、新聞報道などで「伯父の遺志継ぐ」と表現されるようになった。その頃にはまだ、基本的な関係性や目的性には、あまり変化が見受けられなかった。あくまでも、かつての活動を執筆者同士が懐かしく振り返り、亡き伯父を皆で想起する場に過ぎなかった。もちろん、手記執筆者同士が同じ空間で対話することで、お互いの思いを分かち合える場を生み出したことは意義深かったと考える。しかしこれは、筆者が事務局長となって「集い」を開催しなかったとしても、手記執筆者がそれぞれ個別におこなっていた取り組みの延長であったはずである。

3.2 震災20年目の手記集に紡がれたことば

誰もが予期していなかった震災20年目の手記集には、14名の手記が収められた。ここでは、2人の手記執筆者を紹介することを通じて、手記集という記録表現の場を継続して作ることの意義について考えてみたい。

一人目の執筆者は、震災当時、35歳のときに神戸市東灘区で被災した山中隆太さんである。山中さんは、「阪神大震災を記録しつづける会」の10年間の手記集にも継続的に手記を投稿した人で、そのうち8篇が収録されている。執筆の原動力となったのは、震災当時4歳だった娘に、この経験をどう伝えるかということであった。震災5年目に向けて書かれた手記は、娘に宛てた手紙という形式がとられており、「君の記憶のかなたに霞んでいたもの」を蘇らせ、「君が大きくなった時に小さな頃の地震の体験を誰かに話せるようになれば」との望みが綴られている。そして、「語り継ぐことが、貴重な体験をした私達の義務」と述べている（阪神大震災を記録しつづける会、1999）。山中さんの文章の中から、そして、手記を書き続けたという行為の中から、山中さん自身が、当事者として、語り継ぐことを「義務」と述べるほどに背負い込んでいたことを汲み取ることができる。

10年のブランクを経た、2015年の山中さんの手記には、このような使命感を持っていた彼でさえ、抗え切れなかったであろう“時の流れ”が刻まれている。「続けるという行為は、得てして新しいことに取り組むよりもエネルギーのいることなのかも知れない。災害に備え続ける。体験を語り続ける。続けることはモチベーションが必要な根気のいる作業だ。まだ湯気が立っているスープを温め直すのは容易だが、冷えきったスープを加熱するのに何倍もの熱量が必要なように、神戸で起きたことを伝え続けるのは時間が経つにつれ難しくなっていった。震災の手記は17年目まで書き続けたが、一時はそれも途切れてしまった。世間の引き潮に飲み込まれ、もがきあがく自分がいた」（阪神大震災を記録しつづける会、2015）。この文面は、

彼が手記集の発行が終了した後も書き続けるほどの強い使命感を持っていたことと、その使命感を持ってしても書き続けることが困難であったことが率直に記されている。

もう一人の執筆者は、震災当時50歳のときに神戸市須磨区で被災した安藤衣子さんである。彼女も、山中さん同様、9篇もの手記がこれまでの手記集に収められている。安藤さんは、震災から3か月後に、夫を失った体験の一部始終をつぶさに綴っている。「七時過ぎに近所の人が主人をみつけて下さった。階段の中ほどで手首だけがのぞいていました。その手を握りながら、『何故、死ぬんや、生きてほしかった』。近くまで火が回って来た。大事な身の回りの物を持ち外に出た。警察や消防の人達が助けに来て下さったけど、生きている人達優先との言葉に、私はそれ以上お願い出来なかった」(阪神大震災を記録しつづける会, 1995)と、その壮絶な体験と真正面から対峙していることが伺える。

安藤さんはその後も手記を書き続け、死後も続く夫との関係を丁寧に綴っていった。そして、10年目の手記には、「阪神大震災の体験手記を主人のため、供養のためと思いながら書きましたが、十年目に気が付いたのです。十年目で、この悲しい体験をした自分が癒されていたことに気付きました。本当に感謝です。長い年月を行ったり来たりして参りましたが、抜け切れなかった暗いトンネルからやっと出られた思いです」(阪神大震災を記録しつづける会, 2005)と、手記を書くことによって、喪失体験を整理することにつながった、その心模様が記されている。そして、10年のブランクを経た20年目の手記集には、安藤さんが手記を寄せることはなかった。

3.3 震災20年目のことばの裏に

2015年1月10日に開かれた20年目の手記集完成記念会では、山中さんは書き綴る難しさを以下のように述べた。「1月になると、毎年どこかに身を置いて、記録を残そうとしてきました。5年目以降は自分から探しに行かないと、自傷行為をしないと、書けなくな

りました。記録しつづける会の手記集出版が終わってからも、毎年書いていました。書いた手記は、近しい友人にメールで送っていました。けれど、15年、16年経つと、返信がなくなっていったんです。18年目からは書きませんでした。今回、新たに手記集を作ると伺って書かしてもらうしかないと思いました」⁽¹⁾。

一方、安藤さんは、知り合いの方を通じて、筆者にこう伝えてきた。「今回は書かなくて申し訳ありません。けれど、これは前向きな意味で書かなかったんです」。

震災から20年目に手記集という記録表現の場を作ったことによって、書いた人もいれば、書かなかった人もいる。書かなかった人の中には、自らの意思で書かないという決断をした人もいれば、様々な事情から書きたくても書けなかった人もいる。今回、10年のブランクを経て、震災20年目の手記を集め、手記集を生み出す場を創り出したことは、山中さんのように、語り継ぐ使命感を感じながらも、時間経過によって書くことが困難になった人々に対して、記録を残す後押しになったことは間違いない。

しかしここで忘れてはならないのは、安藤さんのように、書かないという選択をした人々に対しての「配慮(care)」(岡部, 2013)である。岡部が指摘する「配慮」とは、災禍の経験を受け止める聞き手/読み手の「配慮」として、注意深く、当事者の言葉を読み取ろうとする際に払われるものだけではなく、語り手が常に対峙することになる「出来事の記憶を物語ることの不可能性やそれを語ることの困難さ」に対しても払われるべきものであるという。出来事を物語る上で立ち足る困難を乗り越え、自らの震災体験について記録を残したいと思う人々のために、そして、今は表現しない/できないが、いつか表現したいと願う人々のために、継続的に記録表現の場を開いておくことが、震災を語り継ぐにあたり、とりわけ重要であることは確かである。

補注

(1) 筆者のフィールドノーツより抜粋。

参考文献

- 1) 阪神大震災を記録しつづける会「阪神大震災 被災した私たちの記録」, 朝日ソノラマ, 1995.
- 2) 阪神大震災を記録しつづける会「阪神大震災 私たちが語る5年目」, 神戸新聞総合出版センター, 1999.
- 3) 阪神大震災を記録しつづける会「阪神大震災から10年 未来の被災者へのメッセージ」, 神戸新聞総合出版センター, 2000.
- 4) 阪神大震災を記録しつづける会「阪神・淡路大震災 20年目のわたしたち」, 非売品, 2015.
- 5) 岡部美香「出来事の語り 聴く場の共同醸成と記憶の分有 災害の記憶と教育 阪神・淡路大震災の想起と追想をめぐる討議 2012年度日本教育学会近畿地区教育事業準備委員会, 2013.

4. わたしに語る資格があるのでしょうか

執筆：矢守克也・杉山高志

4.1 限界のことば

表題として掲げた言葉は、震災から20年と相前後する時期に特に気になったことばの一つである。

このことばには、語り（ことば）という媒体を介して、震災についてコミュニケーションすることが抱える「困難」が、一皮肉なことに一それ自体一つのことばとして表現されている。その意味で、このことばは、言わば、限界のことば、ギリギリのことばである。

筆者らは、阪神・淡路大震災直後から今日に至るまでの約20年間にわたって、語りを通じて大震災を伝えるための意識的な活動、すなわち、震災の語り部活動に従事してきた団体と長期間行動をともにしてきた。その詳細については、矢守（2010）、矢守・杉山（2015）、杉山・矢守（2015）などを参照されたい。「語る資格があるのでしょうか」は、その中で、語り手（被災者）のみなさんが時折漏らしてきたことばでもある。本章では、あらためて、このことばの実存的な意味を考察したい。

4.2 4つの位相

「語る資格があるのでしょうか」。このことばには、以下に整理する4つの異なった意味が込められている。言い換えれば、4つの異なった位相がこのことばにはある。そのことを理解することが、「困難」の実相を適確につかみとる上で、したがって、「困難」の克服法を展望する上できわめて重要である。

第1は、「他の被災者（語り手）」と比較して、自分に語る資格があるかと問うているケースである。典型的には、「同じ団体には、ご家族を亡くした遺族の方もいます。しかし、私の場合、自宅が全壊したものの、家族や親戚に大きな被害はなく…」といったことばに代表される。この意味での資格は、直接的には被害の種類・程度による資格の有無を問題にしているが、そのすぐ先には、「そもそもの範囲までが被災者（被災地）なのか」、「同じく被災地のただ中にあった自治体職員やボランティアはどうなるのか」といった問いがある。もっとも、ここまでなら、被災の「中核的な部分」からのある種の「減衰線」を想定しておけば、事足りるような気もする。「減衰線」のどこかで線引きをできるだろうとの見込みをもって。

しかし、さらに突き詰めていけば、たとえば、「親や先生から震災について十二分に聞いて育った子どもたちはどうか」（いわゆる「第2、第3世代の語り部」の資格問題）、あるいは、いずれやって来る1995年以降に生まれた人びとによってのみ構成される社会において、阪神・淡路大震災は、だれがいかなる資格で語ることになるのか（「歴史認識」の領域との接点）。こういった問題へと視野を広げれば、ある出来事について、「中核的な部分」や「減衰線」をナイーブに仮定することができないこともわかる（たとえば、笠原・寺田（2009）、京都大学防災研究所減災社会プロジェクト・災害メモリアル KOBE（2016）などを参照）。

第2は、「（目の前の）聞き手」に対して、自分が語る資格があるかと問うているケースである。実際にあったエピソードを紹介しよう。ある日、Aさんは、

語り部活動の中で、いつものように、避難所となった小学校で自らが経験した具体的な出来事について紹介していた。ある町での自主防災組織で企画された「防災学習会」でのことだった。Aさんが話を始めてしばらくすると、聴衆の一人がAさんの話を遮った。「私たちは、そんな個人的な経験を聞きたいのではなくて、防災のために役立つ知恵や自主防の活動のヒントについて聞きたいんだ」。

この心ない聴衆の非常識は、今は傍らにおくとしよう。しかし、「(目の前の)聞き手」との関係において、被災者が語る資格について自問自答せざるを得ない状況にあること、このことを本エピソードが示していることはたしかである。この第2の意味に関わる問題は、現実的には、大震災から10年を一つの契機としてすでに表面化していた。たとえば、「あの出来事」をレトロスペクティブに回顧しようとする語り手たちのベクトルと、未来に想定される「その出来事」(たとえば、南海トラフ巨大地震)をプロスペクティブに展望しようとする聞き手たち(社会)のデマンドとの摩擦・葛藤である(矢守, 2010)。また、語りに関する研究の世界でも、ここで検討していることは「ドミナントストーリー」とそれへの対抗の必要性としてすでにおなじみの課題でもある(たとえば、矢守・杉山(2015)を参照されたい)。

第3は、「亡くなった家族」を念頭においたとき、自分に語る資格があるかと問うているケースである。これは、「子どもの死をネタに話している気がして、それが辛い」という、あるご遺族のことばに端的に表現されている。つまり、この意味での資格について口にするのは、たいていの場合、大震災で家族を亡くしたご遺族で、かつ、亡くなった家族の代わりに語ることを、亡くなった家族が自分に与えた「使命(ミッション)」(樽川(2007)、矢守(2010)などを参照)と位置づけて語り部活動を続けている方である。

この文脈に位置づけられる「使命」の意味合いについては、聞き手や周囲にも理解しやすい側面がある。「語り部活動を続けることが、生き残った自分に与え

られた役割だと思っています」— こうしたことばを聞くと、「よくわかる、その気持ちを大事にしてほしい」と共感もし、頷きたくもなる。しかし反面、このような「使命(感)」のすぐ背面で、「こんなことをしてほしいと、ほんとに子どもは望んでいるだろうか」という払拭しがたい疑念に、語り手(ご遺族)が苛まれていることにも留意しなければならない。また、その疑念を解消すべく、「これでいいんだよね、(語り部活動をすることを)許してくれるよね」と亡くなった家族と常に対話しながら、語り部活動が継続されていることをよく含みこんで、その上で語りに耳を傾けることが大切だろう。

第4は、「かつての自分」との比較において、今の自分に語る資格があるかと問うているケースである。筆者自身の印象では、この問いかけは、最近になって、つまり、大震災から20年近く経過してから耳にするようになった。もっとも、重要なのは、震災からの経過年月というよりも、語り部活動の期間が長期にわたっている点だと思われる。と言うのも、この問いは、「最近、話をするのがうまくなりすぎて、作り話をしているような気がする」、「話をしながら、自分はほんとにそれを経験したんだろうかと、一瞬わからなくなることがある」(いずれも筆者と親しい語り手の言葉)といった感覚をベースにしているからだ。つまり、これは、自分自身が体験した大震災を、(かつての自分と比較して)今の自分は本当に正しく話すことができているのかという問いかけである。もちろん、ここで用いた「正しく」という副詞はきわめて繊細な取り扱いが必要とされる用語である。よって、もう少し慎重な表現に置き換えれば、かつての自分なら、そうしただろう語り方と今のそれとでは異なってしまうのではないかと表現する方が穏当かもしれない。

第4の意味も、実際的な問題のみならず理論的にも重要な示唆を含んでいる。まず注目すべきは、ここで起きていることが、先に第1の意味の鍵概念として明記した「他の被災者(語り手)」が、語り手本人

の中の内部分裂—自分の中に生まれた自他の区別—を生む契機ともなりうることを示している点である。特に重要なことは、こうした内部分裂が生じうる根拠である。出来事を経験した本人がそのときその場所で感受したことが侵しがたく神聖な「中核的な部分」として確固として存在するにもかかわらず、その後の語りの繰り返し（語り部活動の蓄積）によって、当事者本人の中にすら「減衰」（出来事を言葉にすることがもたらす出来事の記憶の劣化、出来事とことばの乖離）が生じるからだろう。これが素朴な理解である。

しかし、アカデミックには、したがって、真に実践的に有意義な処方箋を見いだすためには、なぜそうしたことが生じうるのかをさらに踏み込んで問う必要がある。それはおそらく、出来事を経験の「中核的な部分」に、もともと「自他の分裂」（他者）が潜んでいるからである（たとえば、大澤（2015）、矢守（2009; 2010）などを参照）。かみ砕いて言えば、ある出来事を経験が激烈なものであればあるほど、それは、当事者に対して「他ならぬ自分がそれを体験している」というよりも、「(自分の中の) 他者がそれを体験している」かのように、言いかえれば、どこか他人事のような、よそよそしいものとして体験されるからである。これは何もむずかしいことを主張しているのではない。「無我夢中」とか「頭が真っ白で」とかいった表現を思い起こしてみればいい。「幸福の絶頂」、「不幸のどん底」と今振り返りたくなる出来事を振り返ってみれば、だれしもこの感覚—それを体験したのは自分ならざるものであったかのような感覚—を体感できるであろう。

以上を踏まえれば、先に引用した「自分はほんとにそれを体験したんだろうか」という疑問は、時の経過や語りの繰り返しがもたらした出来事の生々しさや記憶の「劣化」の産物だと見なすべきではない。むしろ、出来事や体験にもともと備わっていたものの「回復」だと見るべきである。この意味で、本稿の冒頭に掲げた「困難」は、その表面的なあらわれとは異なっ

て、それ自体が「困難」からの脱出口を示しているのかもしれない。

参考文献

- 1) 笠原一人・寺田匡宏「記憶表現論」, 昭和堂, 2009.
- 2) 京都大学防災研究所減災社会プロジェクト・災害メモリアルKOBÉ 実行委員会「災害メモリアルKOBÉ: 震災を伝えるを考える」, 2016.
- 3) 大澤真幸「自由という牢獄—責任・公共性・資本主義」, 岩波書店, 2015.
- 4) 杉山高志・矢守克也「「Days-Before」の語りの可能性についての一考察: 阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、昭和南海地震の語りの比較分析」, 復興, 13, pp. 34-41, 2015.
- 5) 樽川典子「喪失と生存の社会学—大震災のライフ・ヒストリー」, 有信堂高文社, 2007.
- 6) 矢守克也「防災人間科学」, 東京大学出版会, 2009.
- 7) 矢守克也「アクションリサーチ—実践する人間科学—」, 新曜社, 2010.
- 8) 矢守克也・杉山高志「「Days-Before」の語りに関する理論的考察」, 質的心理学研究, 14, pp. 110-127, 2015.